

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 〈日本語解説〉 「ニューカレドニアの客家調査」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009540">https://doi.org/10.15021/00009540</a>

## 〈日本語解説〉「ニューカレドニアの客家調査」

ニューカレドニアは、原住民・カナク、フランス人だけでなく、アルジェリア人、アジア人なども住む、多民族地域である。アジア人のなかでは、日本、ベトナム、インドネシアなどからの移住者が相対的に多く、中国人は少数派である。それゆえ、日本人移民やベトナム人移民に関する先行研究は豊富にあるが、華僑・華人についての文献は、辞典などで概況が示されている以外ほとんどみあたらない。

こうした状況に鑑みて、著者の張維安は、2018年10月にニューカレドニアで短期の訪問調査をおこない、その華僑・華人、特に客家についての聞き取り調査をおこなった。本稿はその調査報告である。本稿の概要は次の通りである。

- ・ニューカレドニアの客家の多くは、1958年以降、タヒチより移住した。タヒチでは客家がマジョリティであるため、ニューカレドニアも現地の華僑・華人社会において客家の占める比率が高い地域となった。ニューカレドニアに移住した客家は、まず鉱業に従事し、その後、真珠の売買、レストランの経営など商売をおこなうようになった。
- ・ニューカレドニアに移住した第一世代の客家は客家語を話すことができる。しかし、第二世代以降はフランス語が主流となり、次第に客家語を解さなくなっている。言語を除いては、客家らしさを表す文化的要素がほとんどない。レストランには客家料理がなく、春節など中国の年中行事をすることもあまりない。ベトナム人の廟はあるが、華人の廟は存在しておらず、客家を表すような信仰体系は存在しない。ただ、家庭によっては族譜を編纂している。

本稿は、タヒチの客家を通して、タヒチからニューカレドニアに移住したいくつかの家族について言及している。初歩的な調査報告ではあるが、現在の研究状況を考えると、本稿のデータはニューカレドニアの華僑・華人研究に対する多大な貢献をなしている。

ただし、ニューカレドニアの華僑・華人および客家をめぐる調査研究は、今後より体系的に進めていく必要がある。補足すると、私（河合）も2018年8月にニューカレドニアで調査をしたが、そこで得た情報は基本的に本稿のそれと一致している。ただし、1960年代前後にタヒチから客家が移住した動きを第一波とするならば、その後、1980年前後にベトナムをはじめとする東南アジアから移住した第二の波があり、さらに1990年代以降に中国本土から移住した第三の波があった。第二派と第三派には客家が含まれているため、ニューカレドニアの華人のマジョリティはおそらく客家である。しかし、第二派と第三派にはいずれも広府人が多数含まれており、雲南系も少なくなかった。第三派のなかにはタヒチやニューカレドニアの客家の親戚が含まれており、特に龍崗から移住し、当初は広東省の客家料理をレストランのメニューとして提供したこともあった。ところが、それは現地の客家の間で不評であったからという理由で、

後になくなったのである。

こうした第一波から第三波までを考慮したニューカレドニア華人／客家の研究は一方で今後の課題となるが、他方でタヒチとの比較も考察に値する。タヒチでは「ポリネシア／タヒチの華人」としてのアイデンティティが高まり、関帝廟における祭祀活動や獅子舞などの年中行事が復興しているのに、なぜニューカレドニアは中国由来の祭りや信仰が強調されないのか。同じフランスの海外領土となっているオセアニアの島嶼部だけに、両者の対比も興味深い。

(河合洋尚)